

東アジアの総力戦と戦後変革を再考する

―日中比較史の新たな地平へ―

今年 2025 年は、第二次世界大戦の終結 80 周年にあたる。この節目の年に、現時点における歴史研究の到達点を踏まえながら、東アジア、とりわけ中国と日本における総力戦がそれぞれの戦後の変革や社会にもたらした影響について、比較史の視点から再検討したい。

このようなテーマのシンポジウムを企画したきっかけは、本シンポジウムの報告者の一人である三品英憲氏（和歌山大学）が、昨年 9 月に『中国革命の方法』（名古屋大学出版会、2024 年）という優れた著書を上梓したことである。同書は、直接的には戦後中国の土地改革をとりあげ、中国側の公定歴史像を批判しながら、革命の深層で進行していた暴力と混沌に満ちた凄惨なドラマを描いている。そして、その凄惨な事態を招き寄せた背景には、日中戦争や戦後の国共内戦など、戦争の影が通奏低音のごとく執拗にまとわりついていたことも示されている。

まず、著者の三品氏には、上記著書の中から戦時・戦後日本との比較に資するような素材を取り出し、それに焦点を絞る形で問題提起的な報告をお願いした。たとえば、土地改革における戦争の規定性、改革の理念と実態との乖離、それがもたらす深刻な影響、日本社会との比較、従軍兵士たちの質的变化（「逃げる兵士」から「逃げられない兵士」へ）などが、主な話題となる。

続いて、これに応答する形で日本史側の報告を 2 本準備した。

1 本目は日本農業史研究の専門家である齋藤邦明氏（東洋大学）の報告である。そこでは、日本の地主制やイエ・ムラの「封建的性格」を強調してきた従来の議論を相対化する最近の研究動向を踏まえつつ、戦後日本の農地改革論の現況と課題を論じていただく。その上で、三品報告との対話をお願いした。たとえば、農地改革が前提とする日本の農村社会像（GHQ の日本農村社会認識）については、すでに疑義が呈されており、農地改革を正当化するナラティブの生成・変容過程も検討課題となろう。中国土地改革の場合との顕著な相違点とともに、類似した問題の構図も浮かび上がる。

2 本目は、戦争トラウマや従軍兵士の内面に光をあててきた中村江里氏（上智大学）の報告である。三品氏の上記著書で描かれた「逃げられない兵士」の登場を中心に、自身の研究に引きつけて、日本の従軍兵士像との比較や対話をお願いした。戦前の日本社会においては、「赤紙」一枚で死地に赴く「逃げられない兵士」は、ごく通常の姿であったかもしれないが、当時の中国社会のように、そうした存在が自明ではなかった事例を踏まえるなら、改めて「逃げられない兵士」を作り出す社会の側のメカニズムと彼らが抱え込んだ内面的な問題点について、社会情勢との関わりも含め、議論することになる。

なお、本シンポジウムは、外部にも開かれた「場」をめざすという方針にもとづき、本学会理事会の合意を得て、中国基層社会史研究会との共催という形で運営する。フロアからの自由で活発な発言を歓迎したい。

上智大学史学会第 75 回大会 公開シンポジウム

2025 年 11 月 23 日 13:30～17:00 上智大学図書館棟 L-921 教室

趣旨説明：コーディネーター 笹川裕史（上智大学）

報告：三品英憲（和歌山大学） 齋藤邦明（東洋大学） 中村江里（上智大学）